

「あんなに出したのに、もうこんなに硬くしちゃって。いやらしいんだから」

自分から誘っておいてそんなふうになじるのは身勝手だと思いつつ、文字通り急所を握られた状態では抗^{あらが}えるはずがない。女芯からこぼれる蜜液が陰囊^{いんのう}を温かく濡らしている。彼女も激しく昂^{たかぶ}っているのは間違いない。

恵はカウパー腺液の滲む頭部にさらに唾液を垂らし、ヌルヌルと潤滑した。龟头が妖しい光を帯びる。自分のものなのに、自分のものではないように見えた。

「勇希君のオチン×ン、オマ×コに入れてあげるね」

腰をあげ、聳^{そび}え立つ器官を逆手で握って自身の真下にあてがう。それから、恵はゆっくりと体重をかけていった。

「あ……入っちゃう」

声をあげたのは勇希のほうであった。ヌメるものがペニスの先端から徐々に包みこんでゆく。心地よい締めつけ。恵の重みが腰にのしかかってきたときには、勇希の陰茎は女教師の膣にすっぽりと覆われていた。

「いっぱいだわ。オチン×ンがオマ×コのなかでビクビクしてる」

大きく息をつき、恵はまた淫^{せりふ}らな台詞を吐いた。腰を持ちあげ、座りこむ。温かな締めつけが勃起をこする。絡みつく肉褰^{せりふ}が得も言われぬ快さを生みだし、勇希は目を



閉じてそれを味わった。初めて味わう女のなかは、極上というほかなかった。

「気持ちいい？」

色っぽい声で問われても、うなずくので精いっぱい。

「ひさしぶり……やっぱりナマのオチン×ンっていいわあ」

ここにきてようやく、そうか、恵先生は処女じゃなかったんだなと勇希は思った。彼女のファンの男子生徒たちが、その上品で清楚な物腰から、

「恵先生って、絶対に男を知らないよな」

なんて噂し合っていたのを思いだす。この姿を見たら、度肝を抜かれるに違いない。(つていうか、僕、あいつらに殺されるかも)

みんなの憧れの的の先生と初体験できたことが誇らしく、それが快感にいつそうの拍車をかけた。

「もっと気持ちよくしてあげる」

恵は身体を前に倒し、勇希にかぶさるようにして両手をわきにつくと、腰を上下に動かしはじめた。

「あ、あう、あア——」

思わず声が出てしまう。締めつけがさつきよりきつくなった。包みこむものがペニ

スをこすりあげ、その部分からチュ、クチャツと、湿った音がこぼれた。恵の息づかいも激しくなる。

「先生のオマ×コ、気持ちいい？」

答える代わりに、勇希は自らも腰を突きあげた。さらに深い結合を求めている、無意識の動作であった。

「あん、はうん」

恵も可愛らしく、それでいて淫らな喘ぎをこぼした。ぎくしゃくしていた互いの動きがやがて同調し、快感が高まる。

「あん、あん、ああん、はん、あう——」

恵のよがりが大きくなる。ベッドもギシギシと軋み、きし階下の葉子たちにも聞こえるのではないかと心配になった。だからといって、やめようなどとは少しも思わなかった。こんな気持ちいいこと、そう簡単にストップできるはずがない。

鼠蹊部そけいがぶつかり合い、濡れた地面を踏むような音がした。その一帯も濡れているのがわかる。夏の夜。たちまち全身が汗ばんでくる。

（これがセックスなんだ——）

性器を繋げているだけなのに、肉体の蕩けとろ合う一体感を覚える。目の前でゆさゆさ

と揺れる乳房を見てみると、催眠状態に陥ってしまいそう。

「先生……もう、ダメ。イッちゃう」

たちまち限界を迎え、勇希は甘えた声を出した。

「もうなの？」

困ったふうに言われるのは、やはり恥ずかしかった。でも、いくら堪えようと思っても、ペニスの根元の溶岩は、爆発への秒読みをはじめている。

「初めてだからしょうがないか。いいわよ、イッても」

恵は天井を見あげてちよつと考えてから、

「このままオマ×コのなかに出しちゃっていいから」

排卵期を計算したのだろう、そう告げてから膣の締めつけを強くした。腰の動きにも、恥丘をこすりつけるような前後の動作を加える。

「あつ、あつ、イッちゃう、出る——」

自分の意志とは関係なく全身が暴れ、勇希は先生のなかに快美の放出を遂げた。ドクツ、ドクンツと、何度にも分けて。

「あくう——ン、すてき……」

恵も腰をわななかせ、悩ましい吐息をこぼした。